

# 所報

INSTITUTE OF BUSINESS RESEARCH  
COLLEGE OF ECONOMICS  
NIHON UNIVERSITY

No. 61

## 展 望

「起業に年齢は関係ない」と思っていた。しかし、24歳にして既に2社目を起業したという浅枝大志氏（株メルティングドッツ代表取締役）の若々しさとさすがしさ、そして良い意味での自信は、私には鮮烈だった。彼は開口一番に学生に語った「学生時代は遊べ、そしてネットワークを築け」、「僕は好きなことをやってきただけ。それはパソコンと英語そして会計学」と。協力者がいなくてもまず自分ひとりで、資金は回るだけあれば十分、高いオフィスは当面必要ない、矢継ぎ早に彼の口から発せられる明快なメッセージに、学生達は釘付けとなった。いまや世界中で参加者1,000万人を超えるネット仮想空間「セカンドライフ」、そのビジネスへの可能性を誰よりも早く察知し、日本への導入を目指して最先端を走っている浅枝氏は、若き日のビルゲイツや孫正義を髣髴とさせた。

聴衆を魅了した講演を終えて数日後、100名を越える参加者のアンケート1枚1枚に、丁寧に彼の自筆のメッセージが添えられて返送されてきた。時代の寵児は、実に義理堅くあたたかい好青年でもあった。角川映画とメルティングドッツとの提携が報じられたのは、その数日後のことであった。

銀座の老舗テーラーを見事に再生させた3代目社長鰐淵美恵子氏は、「しなやかで美しく力強く」それが始めて会った時の印象である。柔らかな物腰の奥に秘められた情熱と信念、船場の商家で生まれたというその精神と行動力は、銀座で見事な花を咲かせた。笑顔を交えて淡々と語られる彼女の半生は、しかし、幸せなシンデレラストoryではなかった。老舗なるが故の重圧と責任、その誇りを捨てられないばかりに陥ってしまった苦境。周囲の非難を浴びながら、スーツケースいっぱい洋服生地を詰め込んで、自ら販売に回った日々。老舗の高い壁を乗り越え、自ら挑んだ新ブランドの確立。「老舗だからこそ革新が必要」と彼女は繰り返し力強く語った。それは「第二の創業」と呼ぶにふさわしい。

しかし、それ以上に私が惹かれたのは「育む」という彼女の姿勢である。仕立て職人のための「日本テーラー育成学院」設立、若手プレーヤーのための「ジャズの夕べ」など、彼女は懸命に人を育み、事業を育て、それを通じて「銀座文化」の灯を守り続けようとしている。その姿に強く打たれたのは、私ひとりではないと思う。講演を終えた彼女に、質問を求める聴衆の列が長く続いていた。

（産業経営研究所 所長 三井 泉）